派遣研究者：田保　顕

相手先機関：釜山大学校

専 門 分 野 ：韓国の英語教育

テ　ー　マ：「グローバル言語」としての英語と都市社会の形成

— 釜山にみる「世界都市」への試み

月度報告書（2012 年 9 月－2013 年 8 月）

「月度活動報告書」（2012 年 9 月度） 1

「月度活動報告書」（2012 年 10 月度） 5

「月度活動報告書」（2012 年 11 月度） 9

「月度活動報告書」（2012 年 12 月度） 12

「月度活動報告書」（2013 年 1 月度） 14

「月度活動報告書」（2013 年 2 月度） 17

「月度活動報告書」（2013 年 3 月度） 19

「月度活動報告書」（2013 年 4 月度） 21

「月度活動報告書」（2013 年 5 月度） 24

「月度活動報告書」（2013 年 6 月度） 25

「月度活動報告書」（2013 年 7 月度） 26

「月度活動報告書」（2013 年 8 月度） 28

「月度活動報告書」（2012 年 9 月度）

田保　顕（「頭脳循環派遣」研究員）

今月（2012 年 9 月）は長期滞在の準備に追われる一ヶ月だった。

9 月 1 日、空港からタクシーに乗って釜山大学へ向かった。運転手さんが 50 歳代くらいのかたで、日本語を勉強しているらしかった。初めはいろいろと話しをしていたのだが、途中、渋滞に巻き込まれたあたりから両者ともに話題も尽き、沈黙が続いた。だからなのだろうか、運転手さんが CD を取り出して、曲を流し始めた。日本語と韓国語が入り混じった演歌だった。「これを練習しているのです」と言って、運転手さんは曲にあわせて歌い始めた。ああ、アジアの国に来た、と思った。少なくとも東南アジア諸国では、このようなことは当たり前だからである。

何とか私の入る寮（雄飛館 A 棟）の前に着いた。前日、「アシスタントの学生が待っている」と知らされていたが、誰もいない。電話をすると「いまそちらへ向かっている」との返事だった。しばらくすると学生がタクシーでやってきた。あとは無事に入寮できたのだが、ここでもやはり、ああ、アジアの国に来た、と思った。これは逆に、日本はあまりアジア的ではない、ということでもある。なぜそうなったのだろう？

新学期の初日が 9 月 3 日で、この日に所長の金東哲教授やパク・キュテク教授をはじめ、10 名ほどの先生がたとお会いした。温泉場にある食堂で韓定食をごちそうになりながら、自己紹介と韓国での関心事について少し話した。

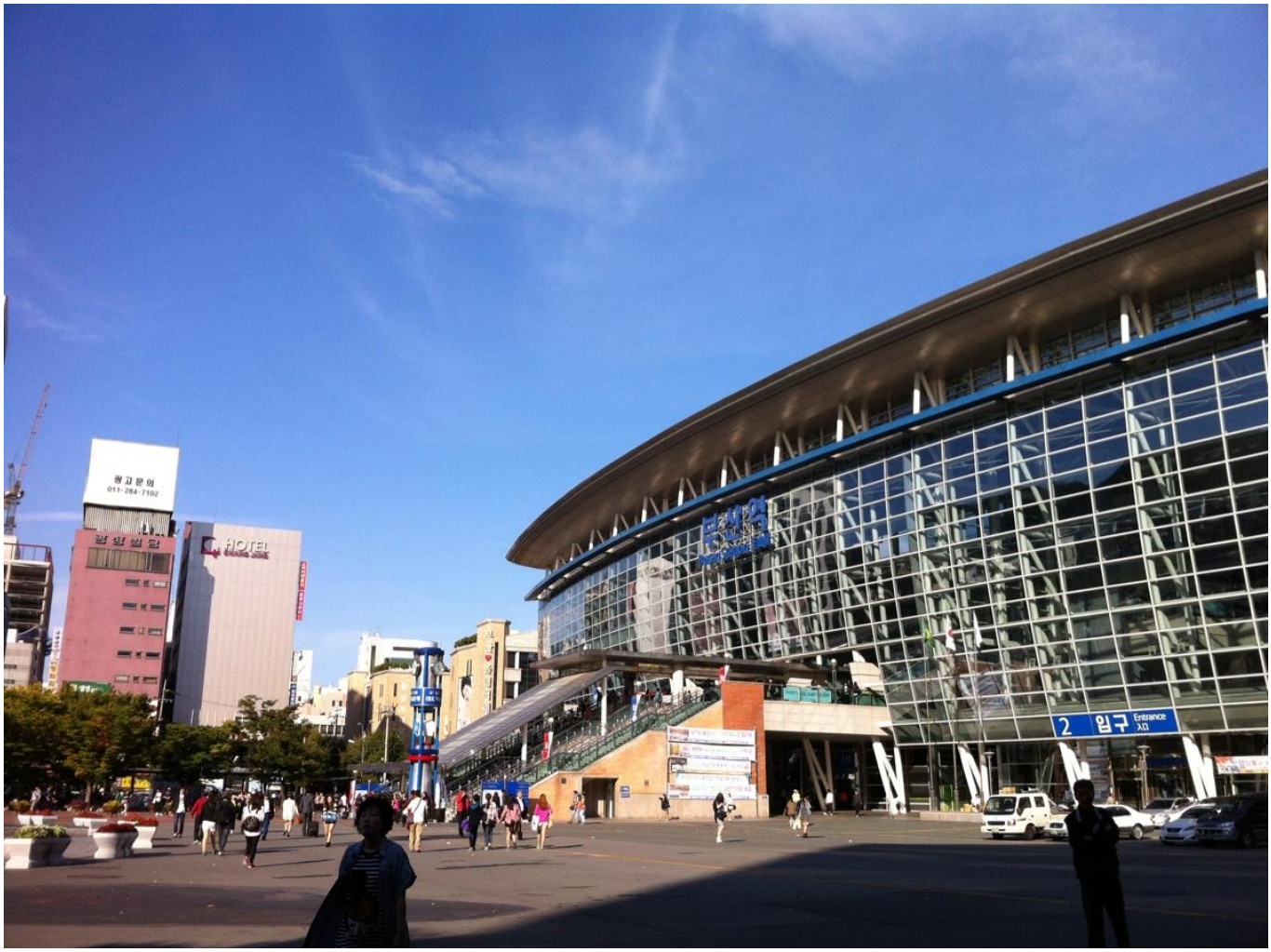
その日からさまざまな書類手続きが始まった。釜山大学の研究員としての登録や、図書館入館のためのカードの作成、そして何よりも重要なのが外国人登録であった。

これらの手続きは入れ子構造になっていて、研究員登録や図書館入館のためには書類に外国人登録番号を記入しなければならないのだが、外国人登録をするためには所属、つまり釜山大学の研究員ですよ、ということを証明しなければならないのだ。とにかく、大学から証明書を発行していただいて、アシスタントの学生に出入国管理事務所へ連れて行ってもらった。午後 3 時ごろに到着したのだが、順番待ちの人でいっぱいになっている。1 時間半後、ようやく順番が回ってくる。しかし、そこで手続きをして即カード発行、というわけにはいかない。1 ヶ月後、郵送されてくるという。それまで私は、ずいぶん宙ぶらりんな存在である。

9 月 27 日、これまでの経歴や経験、韓国での関心についてプレゼンテーションする機会を頂いた。40 分程度話し、あとは質疑応答で、いろいろ質問や指摘をいただいた。特にホームレス研究に関するものが多く、韓国でも貧困についての関心が高まっているのを感じた。また、私の英語教育についての関心について、「英語もコミュニケーション・ツールの 1 つとして受け入れれば良いのではないか」、「韓国でも実生活上では英語を必要としないが、それでも英語は習得した方がしないより良いのではないか」というご指摘があった。私は「言語（特に英語）はツールである以上の『意味』を持つようになる、それがなぜ、どのように構成されるのか知りたいのだ」と申し上げた。

今月は本当に、韓国の生活に慣れることと長期滞在の準備で精一杯だった。来月はもう少し落ち着いて勉強できるだろうか。

釜山大学正門。右手に見えるのは NC 百貨店。



釜山駅。この周辺にホームレスらしき人々がたくさんいて、集めたダンボールを整理したりしている。

釜山大学キャンパス内。このように、山の斜面に大学が広がっている。

「月度活動報告書」（2012 年 10 月度）

田保　顕（「頭脳循環派遣」研究員）

9 月 29 日（土）から 10 月 1 日（月）にかけての秋夕（チュソク）と 10 月 3 日（水）の開天節が明けて、釜山国際映画祭が始まった。海雲台ビーチには舞台が設えられ、連日のように俳優・女優や映画監督が登場する。どういう人たちがこの祭りを楽しんでいるのかを確認するために出かけてみた。

海雲台ビーチには年齢層を問わず人がやってきていた。家族連れも多かった。センタムシティにある「映画の殿堂」にも行ってみた。こちらは若い男女が比較的多かった。しかし、たくさんのチケット・ブースがあるわりには客が少ない。公式発表では動員観客数 221,002 人（オンラインチケット購入者）となっている。なるほど、映画館内にいたのかも知れない。

10 月 19 日（金）、ようやく外国人登録カードが届く。1 ヶ月どころが、40 日かかった。しかしこれがないと、生活上様々な不便が生じるのである。ちなみに、釜山広域市における外国人登録者数は 32,471 人であり、そのうち日本人の数は 936 人（2010 年現在）である。

10 月 25 日（木）、韓国民族文化研究所の招待でドイツから韓国に来られていたベルクマン教授が大学の仁徳館で講演を行なった。タイトルは”Morally Mediated Globalization”。教授はグローバリゼーションの「ソフトな側面」に焦点を当て、道徳的な心性により地球上の人々が繋がっていると主張する。教授は、宇宙から撮った地球の写真がアイコン化し、それによって地球が 1 つの世界（“one world”）であると人々に認識されていること、2004 年のスマトラ沖地震ではメディアの伝える現地の惨状が世界中の人々の同情を呼び、多額の義援金が集まったことなどを例に説明された。

次の日は朝早く起きて老圃にある釜山総合バスターミナルへ行った。ソウルへ出かけるためである。4 時間 30 分ほどでソウル高速バスターミナルに到着し、地下鉄で鐘閣駅へ。この辺りには以前たくさんの安宿があったと聞いていたのだが、再開発が進み、安宿とは無縁の場所になりつつあるようだ。

ソウル行きの目的は京畿道坡州市にある英語村「パジュ・キャンプ」を見学することだった。ここは英語研修でなくとも入場ができる。日曜日だから人が多いかも知れない、と思いながら、地下鉄合井駅から 2200 番バスに乗って 1 時間 30 分ほどで英語村入口に到着する。

さて、バスを降りたのは私一人であった。バス停から 5 分ほど歩くと英語村の入口だが、閑散としている。チケット売り場では韓国語で話しかけられた。おや、英語使用のみではないのか、と不思議に思いながらパスポート型の薄い冊子と飛行機の搭乗券を模したチケットを受け取る。イミグレーションを模したゲートには黒人の若い女性が一人座っている。英語で質問されるのか、と身構えたが、”How are you?”とそっけない一言のみ。とりあえず”Fine.”と言うしかない。

広大な敷地の中に様々なヨーロッパ風の建物が立ち並ぶ。その広さに対して、数組の家族連れがポツポツといるだけである。レストランのテラスでは白人男性 2 人がビールを飲んでいる。しかし、表に立てかけられたメニュー表は韓国語であった。どんどん奥へと歩いて行くと、イギリス風の家が立ち並ぶ一角にたどりついた。どうやら英語研修を受ける人たちの宿舎らしい。しかし、全く人の気配がない。

どうやら、思っていたほど利用されていないのかも知れない、と思いながらふと、子どもたちの叫び声にひかれてそちらへ近づいてみると、「授業」のようであった。白人男性の呼びかけに、子どもたちは「ワ～ッ！」という、言葉にならない歓声をあげている。

途中、一人のお母さんが「チョギヨ～！（すみませ～ん)」と言いながらコンビニに入っていくのを見た。やはり、英語研修でない限り英語村は「英語使用のみ」ではないらしい。

最近、「英語村の大半が赤字である」というニュースが流れていた。私は、こうした施設の成功・失敗よりも、「何がこのような施設を作らせる力となったのか」にこそ興味がある。

釜山国際映画祭開催中の海雲台ビーチ。

センタムシティ駅近くにある「映画の殿堂」。周辺の映画館で映画が上映されている。

英語村入口。

「月度活動報告書」（2012 年 11 月度）

田保　顕（「頭脳循環派遣」研究員）

11 月半ば、文献調査のためソウルへ出かけた。10 月後半に旧ソウル市庁舎がリフォームされ、図書館になったという話を聞いていたので、早速行ってみることにした。

入り口を入ってすぐ、１階フロアは一般書籍や雑誌が並んでいる。私は主に教育に関する書籍を見ていたが、壁一面の背の高い書棚には法律関係の書籍が並んでいるのに気がついた。なるほど、いくつかあるテーブルでは年齢や性別に関係なく、たくさんの人が勉強している。資格試験対策の自習をしているのかもしれない。また、同じフロアには展示室もあり、名前は失念したが、解放前の韓国の文学者についての展示が行なわれていた。大阪滞在の写真や生原稿などを見ることができた。

１階から２階へ上がる階段は広くて、多くの人がそこに座って本を読んでいた。台北でもそうだが、ソウルでも書店の床に座って本を読んでいる人たちを大勢見かける。日本には一時期「ジベタリアン」と呼ばれる、コンビニの前で買い物したものを食べながら地べたに座っている若者がいたが、本屋の床に座っている人はあまり見かけない。

２階も一般図書が並んでおり、さらにデジタル資料室とブックカフェがある。そして、今回の目的場所である３階が、ソウル資料室である。市政概要や統計年鑑、パンフレットなどが豊富に揃っており、しかもそれらが開架されているので便利である。とは言いながら、なかなか英語村に関する資料というのは出てこない。そこで次に、韓国国立中央図書館へ行ってみることにした。

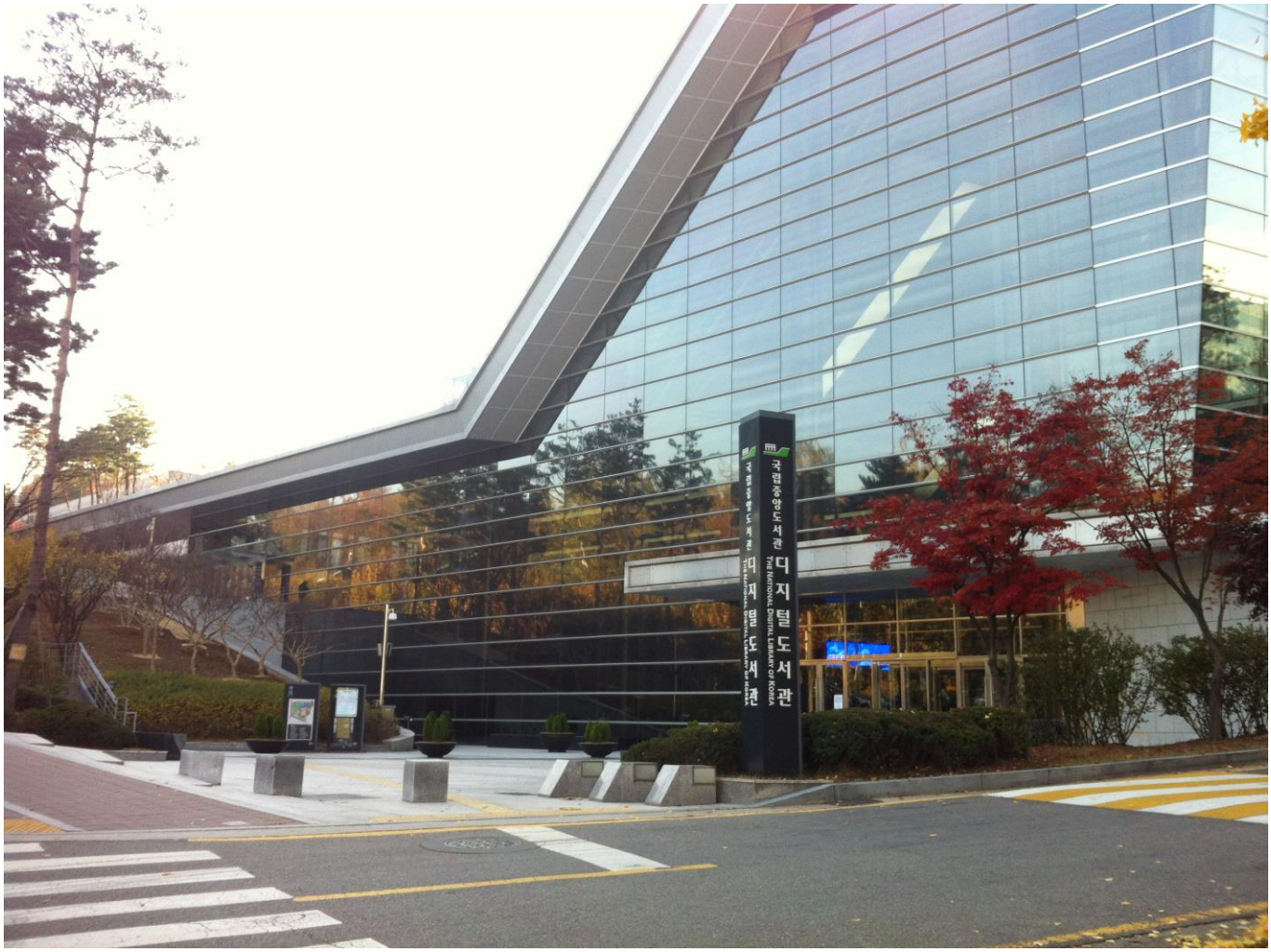
韓国国立中央図書館は高速ターミナル駅から徒歩 15 分程度のところにある。そこに付属しているデジタル図書館が目当てである。入ってすぐのところにある端末で一時的な会員登録をして利用する。ところが、自身の外国人登録番号を入力しても「オーソライズされていない」と出るばかり。困って受付の女性に訊くと、こちらが住所や電話番号を口頭で伝えて、彼女がそれを端末に入力して、どういう具合にか ID とパスワードが発行された。それを使って今度は空いている端末を選択し、そこで資料を見るわけである。

キーワードを端末に入力して PDF 化された論文を検索・ダウンロードし、それを読むのであるが、これはその場でしか閲覧できないようになっている。その一部が手元に欲しければ、有料で印刷も可能である。何とも便利なものだ。

ソウル市・京畿道の英語村に関する資料を見ていて、2009 年辺りに英語村運営に関する調査が行なわれていることを知った。実際、採算が取れなかったのであろう、2012 年 11 月いっぱいで京畿道・安山キャンプが閉鎖されるというニュースが入ってきた。

11 月の最終週、とうとう韓国語を習うことにした。せっかく釜山大学校に来ているので、国際言語教育院にお世話になることにした。独学ゆえの身勝手な発音を直してもらうため、また外国人に対してどのように韓国語を教えるのかも見たかったので、正規授業の前にプレ授業を受講した。中国人 7 人、日本人 4 人、モロッコ、ウズベキスタン各 1 人という構成であった。先生は女性の方で、なるべく韓国語のみで授業をしようとしていたが、ふとした拍子に英語や中国語が出てきた。その方が「効率的」だからである。手元にない物の名前や、少し抽象的な概念、ある文型を使用するときのニュアンスなどを外国人に伝えるのに学習目的言語を使用するのは少し難しい。説明されるべきもので説明をすることになるからだ。

これ以降の数ヶ月の滞在で、どれくらい韓国語ができるようになるか。自分自身が実験対象である。



韓国国立中央図書館にあるデジタル図書館。

今回お世話になったゲストハウスの玄関に掲げられた標語。「もう一度来たい観光都市ソウル！　我々が大韓民国の競争力だ」。とても興味深い。

「月度活動報告書」（2012 年 12 月度）

田保　顕（「頭脳循環派遣」研究員）

12 月 3 日月曜日より、韓国語講座の 2012 年度冬学期が始まった。

釜山大学校の北門を北東へ少し歩いたところに、釜山大学校国際言語教育院がある。そこでは在校生はもちろん一般の人びとへの外国語教育が行なわれている。英語に関して言えば、TOEFL や TOEIC といった試験への対策講座、英語会話講座、Career English と呼ばれる、自己紹介や面接、履歴書の作成法などに関する講座が開かれている。英語のみならず、中国語・日本語・フランス語といったいわゆる「第２外国語」の講座も設けられている。地域の子どもたちへの英語教育も積極的に行なっており、朝は両親に送り迎えしてもらって通う小学生たちがたくさん見受けられた。

ここでは韓国人に対する外国語教育の他に、外国人に対する韓国語教育も行なわれている。韓国語に関して私はほぼまっさらの状態で韓国にやってきた。そんな自分がどれくらいの期間でどれくらい韓国語を理解し、話せるようになるだろうか。そのような興味も手伝って、先月（11 月）に申し込み手続きをし、釜山大学校の韓国語講座に参加することにした。

ソウルにある延世大学校をはじめ、韓国の大学はそれぞれ、一般に「語学堂」と呼ばれる機関を持っている。各大学に「外国人のための韓国語教育機関」が存在するわけである。そして毎年毎学期、多くの外国人が受講を希望し、韓国へやってくる。その多くは 20 歳前後の若者であり、交換留学生も多いが、たいていは韓国の大学への入学を希望している。韓国語講座は初級・中級・高級の 3 段階と初級 1 級～高級 6 級の 6 段階にレベル分けされている。これは韓国語能力試験（通称：TOPIK）のレベル分けに準じたものである。

私は初級 1 級の授業に参加した。1 クラスは平均 14 名で、1 級だけで 4 クラスある。私のクラスは日本人・ロシア人・カナダ人が各 1 名で、残りの 11 名はすべて中国人である。講師は 1 クラスにつき 2 名（担任・副担任）いて、交替で授業を行なう。授業は 1 日につき 100 分×2 コマ、週 5 日である。1 学期は約 3 ヶ月（実質は 10 週）であり、1 年に 4 学期あるので順当に行けば 1 年で中級 4 級を修了することができる。しかし実際はそのような学生はまれなのだそうだ。

実際それほどに授業内容は密度が濃く、高度である。私が今月受けたのは初級 1 級で「初歩の初歩」であるが、単語や文法の内容は簡単でもスキットや対話の練習量が想像以上に多い。しかも、カリキュラム通りに進むので、分からなければ置いてけぼりをくらう。そしてもちろん、授業はほぼ韓国語のみで行なわれる。たまに単語レベルの英語が混じるが、先生方はなるべく簡単な韓国語とジェスチャー・絵などを利用して教えようとする。中国人学生たちは数が多いので、つい中国語を話してしまう。すると先生方は決まってその学生を叱る。私のクラスでは、先生が中国語を聞きつけるとその学生に対して「100 ウォン！」と言って 100 ウォンを箱に入れさせる。「貯まったらみんなでピザを食べましょう」、というわけである。

授業はどんどん進むが、学生たちへの先生方のケアは細やかである。朝一番に教室に入ってくると、先生は前回学習した文法項目を使って学生たちに質問し、韓国語で答えさせる。その中で学生たちの性格・性質・生活のありようをつかんでいく。内容を理解できない学生がいると、どこまでも具体例を挙げて言葉の使い方を理解させようとする。

対話練習が多いのはありがたいのだが、質問に「先週末は誰と何をしましたか？」や「明日の午後は誰と何をしますか？」といったものが多いのには参った。私は普段 1 人で作業していることが多いし、何より「昔のことは覚えていない」し「明日のことなどわからない」のである。しかし、事実を述べることよりも嘘でもいいから「正しい韓国語で答える」ことが重要であるので、「친구와 같이 밥을 먹었어요.（友人と飯を食いました）」などと答えている。

先にも述べたとおり、韓国の大学ではそれぞれの特色を活かしつつ、外国人に対して韓国語教育が行なわれている。韓国人自らが外国語を学ぶだけではなく、韓国語を積極的に外国人に学んでもらおうとしているわけである。ここに、言語に対する韓国人と日本人の意識の違いを探ることができるような気がしている。

釜山大学校国際言語教育院の玄関。8 階建てで、各フロアで様々な言語教育が行なわれている。

「月度活動報告書」（2013 年 1 月度）

田保　顕（「頭脳循環派遣」研究員）

日本の年末年始の雰囲気は韓国では感じられない。実際、1 月 1 日だけが休日で、2 日には大学キャンパスをたくさんの学生たちが歩いていた。韓国での本格的な元日は、今年は 2 月 10 日である。

言語教育院の韓国語講座でも年末年始などお構いなしに授業が行なわれた。しかも、1 月 3・4 日の 2 日間は中間テストであった。この韓国語講座では中間・期末テストを実施し、2 つの試験の点数が平均 70 点を下回ると落第することになっている。試験科目は말하기（スピーキング)、어휘/문법（語彙・文法)、읽기（読解)、듣기（リスニング)、쓰기（作文）の 5 つである。それぞれ 20 点ずつ、合計 100 点満点である。スピーキング試験は 2 人の面接官が質問する内容に適切に答えることである。絵を見せられてその様子を韓国語で表現したり、発音チェックのため文章を音読させられたりもする。何よりも大変なのが 1 分程度 1 人で話さなければならないことである。今回は「故郷を紹介する」というテーマであった。私は大阪城が有名だとか、タコ焼きが美味いとか、いろいろ話したものの冷や汗モノであった。

韓国語講座では授業を受けるだけでなく、言語交換プログラムで韓国人学生たちと実際に韓国語で話す機会も設けられている。基本は一対一で活動するのであるが、2 週に一度、グループでも活動することになっている。学期中 7 回、そのうち 3 回はグループで活動するわけである。学生側はこの言語交換プログラムに参加することによって何らかの単位認定が行なわれるそうである。私にとってこのプログラムはたいへんありがたいものであった。

そして他の学校と同様に、この韓国語講座にも遠足がある。1 日かけてみんなで遠出するのである。名目は문화탐방（文化探訪)。まずはバスに乗って蔚山にある外古山甕器村へ。ここはキムチを漬ける瓶がたくさん展示されており、実際にも作っているようであった。顔の形をした面白い瓶や、ギネス世界記録として認証されたという「世界最大の甕器」もある。続いて、慶州市の읍천항で海を見る。ここは海岸の岩が柱のようになった柱状節理が見られる。もちろんみんなそんなことにはお構いなしに、写真を撮っては騒いでいた。その後スンドゥブチゲで昼食、最後の目的地は慶州ワールドという遊園地であった。この日はかなり寒い日であったが、学生たちは幼稚園児たちにまじって嬉しそうに乗り物の列にならんでいた。

これらの訪問地は実は、テキストのテーマで取り上げられたものだったのである。ちなみに我々1 級では、遊園地が取り上げられていた。

外古山甕器村内にある甕器文化館。

읍천항の海岸。

慶州ワールドの正面玄関。

「月度活動報告書」（2013 年 2 月度）

田保　顕（「頭脳循環派遣」研究員）

今年（2013 年）は 2 月 10 日が설날（旧正月）で、その前後から 1 週間程度は大学キャンパス内から人も自動車も姿が見えなかった。それほど、旧正月は大切なものなのであろう。釜山大学校国際言語教育院の韓国語講座に通っている中国人学生たちも、この時期にはあっという間に姿を消した。みんな故郷に帰ったのである。日本に生まれ育った私にはこの感覚があまりピンと来ない。しかし、こうして目の当たりにすると、彼ら／彼女らがいかに旧正月を大事にしているか、さらに言えば故郷や家族をいかに大切に思っているかを思い知らされる。

さて、今月で韓国語講座 1 級（初級 1）の前授業が終わった。国際言語教育院での授業は対話がとても重視されている。面白いことに、最初は戸惑った韓国語のみの授業スタイルにも最終的には慣れてしまい、韓国語で話すことが「自然なこと」だと思えるようになった。もちろん知っている語彙も構文も少なく、言いたいことや伝えたいことの半分も話せないのであるが、それでも手持ちの材料でいかに相手に伝えるかを工夫する練習にはなった。

もちろん､外国人に対して韓国語のみで韓国語を教授する先生がたの苦労は並大抵ではないだろう。というのも、先生がたも、われわれ外国人が理解できる範囲で話さなければならず、語彙も構文も限定されるからだ。しかも、なるべくゆっくり話さなければならない。「シャワーを浴びるように英語を聞く」ことが英語習得の方法として語られることがある。確かに、かなり英語を理解できる者がそうすれば英語の発音やリズム、抑揚などに慣れることができるであろうが、ほとんど英語を理解できない者には苦痛でしかなく、悪くすれば「単なる音として聞き流す」癖をつけてしまう。英語に限らず、理解できない外国語を浴びせかけることに意味は無いのである。外国語の音声を「意味のある言葉として」受け取る経験を経て外国語は習得される。「外国語で授業をすれば学生たちは外国語を習得できる」という乱暴な方法でないことに、改めて感心させられた。

韓国語講座の언어교환도우미（言語交換プログラム）で知り合った学生に용궁사（龍宮寺）へ連れて行ってもらった。ここは釜山の有名な観光地の 1 つで、絶壁の上に建てられた寺なのである。参道には屋台が立ち並び、観光客たちがオデンなどを買って食べている。日出岩という、日の出を拝むのに絶好の場所があり、そこでお坊さんとたくさんのおばさんたちが海に向かって熱心にお経を唱えていたりする。

ふと、海岸の岩場に石を積んだものがたくさんあることに気がついて何故そのようなことをするのか質問してみると、「お祈りです。1 人の人が全部積むのではなくて、誰かが積んだ石の上に 1 つ積んで、その後また誰かがその上に 1 つ石を積んで行くのです」と教えられた。

週末ということもあって、行きも帰りもバスは満員で立錐の余地もないほどであったが、それほど外国語は聞こえてこなかった（中国語と、日本語が少し）。釜山に来る外国人観光客は海雲台と南浦洞・チャガルチくらいしか立ち寄らないのかもしれない。

釜山の北東・機張にある海東龍宮寺。本当にすぐ海のそばに建てられている。

海岸の岩場にはこうした積み石がたくさん見られる。

「月度活動報告書」（2013 年 3 月度）

田保　顕（「頭脳循環派遣」研究員）

3 月 1 日は三一節（独立運動記念日）で公休日であった。学生寮前にはたくさんの自家用車が駐車されていた。新入生たちが両親とともに来ているのである。街はどんな様子だろうかと釜山駅前や南浦洞に出かけてみた。太極旗があちこちに掲げられているものの、いつもの休日の風景と変わりなかった。テレビでニュースを見るとソウルを中心に各地で独立運動を記念するイベントが行われていたようである。テレビで朴槿恵大統領の演説、日本製品不買運動を見て、とても複雑な気持ちになった。

インフォーマルな形で、少しずつ英語に関する話を聞かせていただいている。ある小さな会社を経営している方に「学生を採用する際に英語力を重視するか」という質問に対して、「大企業ほどではないが英語力は参考にする。履歴書を見て同じようなレベルの学生が複数いると選べないので、少しでも差をつけるため利用する。結局は選別のためだ。また、学生が努力のできる者かどうかを判断する材料にもなる」ということを話して下さった。

国際言語教育院でいっしょに韓国語を勉強している方々とともに太宗台公園に行った。太宗台公園は釜山市南部の影島にあり、釜山駅前からバスに乗る。そこへ行くまでの地下鉄の乗り換えの際、1 人の大学生がマゴマゴしている我々に道を教えてくれた。彼は英語交じりで話してくれたので、つい英語に関する質問をしてしまった。現在、釜慶大学の学生だそうである。「こんな小さな頃から」と、身振りを混じえながら子どもの頃から英語を勉強させられることを強調し、「でもスピーキングが苦手だ」と言う。「そんなことはないでしょう」と言うと「いや、TOEIC や TOEFL などのテストの点数を取るのはみんな得意だが、スピーキングになると途端に緊張する」と応える。「韓国の学生は就職のために 2～3 の外国語を勉強しなければならないと聞いたが本当か」と質問すると、「まさか」と笑いながら「しかし英語は無条件（무조건）だ」と言う。韓国の人たちは会話の中でこの「無条件（무조건)」をよく使う。日本語の「ゼッタイ」に近い使い方なのだが、「英語ができなければ話しにならない」という状況がよく表されている。

3 月下旬、4 ヶ月ぶりにソウルへ行った。図書館での資料閲覧が目的である。釜山とソウルの気温差に驚いた。韓国の中では、釜山はずいぶん暖かいところなのだ。

月末の土曜日夕方、ソウル市庁前にある徳寿宮大漢門で労働者団体が幾つか集まり、演説会をしていた。参会者数はそれほどでもなかったが、それをとり囲む機動隊員の数が尋常ではなかった。演説者は労働者の苦境を訴え、朴政権の政策を批判する。シュプレヒコールが起こり、さあ、青瓦台まで行進か、しかし、これだけ大量の機動隊員を押しのけることはできないだろう、などと思っていると、代表者が「お疲れ様でした（수고하셨습니다)」と挨拶し、掲げられた旗は次々と巻かれ、参会者は解散した。機動隊員たちも隊ごとに整然と解散していった。何事もなく良かったとはいえ、それではあの大量の機動隊員は何だったのか、とも思う。

太宗台公園

「月度活動報告書」（2013 年 4 月度）

田保　顕（「頭脳循環派遣」研究員）

今月の初めごろ、日本語サークルに参加させてもらった。韓国語では일본어 모임（日本語の集まり）と呼んでおり、釜山大学校の学生有志が 6 名前後集まって日本語で話す非公式の会である。釜山大学校の学生たちは本当によく勉強する。この日本語サークルも日本語会話を練習するために毎週月曜日の夕方に自発的に行なっているのである。

釜山大学校正門横にある NC 百貨店のカフェに集まった。韓国のカフェには 4〜6 人程度が会議や勉強に使えるよう個室のように仕切られた座席が用意されていることがある。コーヒーを買い、待っているとメンバーがやってくる。そしてテーマを決め、日本語会話を始めるのである。ちなみに、このときのテーマは「嘘でもいいから自慢してみよう」であった。

みんな驚くほど日本語が達者である。メンバーの中には交換留学で日本に住んでいた者もいたが、それにしてもかなりのものである。いい機会なので、英語も含め普段の勉強について訊いてみると、「誰も好き好んで勉強などしない。しかし就職の際、英語ができることは必須なのだ。英語ができなければ書類の時点で落とされてしまう」といった話が出た。人文学部の学生は、TOEIC の平均スコアが 950 なのだと聞いて驚いた。ある男子学生が女子学生に「OPIc（英語のスピーキングテストの 1 つ）の勉強をしないか」と誘うと、女子学生は「まずは TOEIC を終わらせないと」と言った。「TOEIC を終わらせる」とはスコア 900 以上を取るということである。興味深い表現だと思った。

20 日、国際言語教育院の先生と、ともに韓国語を勉強している人たち 3 人とで慶尚南道河東郡にある青鶴洞（청학동／チョンハクドン）に行った。智異山の麓にある村で、ここには韓国の伝統的な生活を続けている人々が暮らしている。以前は電気も通っていなかったそうだ。面白いのは、夏休みや冬休みには子どもたちがここへ漢字を習いに来るということである。どこまでいっても韓国の人たちは勉強に結びつける。

生憎の雨であったが、村に到着するとそれが雪に変わっていた。まさか 4 月に雪に降られるとは思わなかった。村の人たちは白い韓服を来て何か作業をしている。黄色い壁の伝統家屋を見ながら歩いていると、書堂（서당／ソダン）があった。書堂とは朝鮮王朝時代の私塾のことで、日本の寺子屋のようなものである。書堂の前でウロウロしていると、建物から先生が出てきて「入りなさい」と言った。中には中学生くらいの少年が 3 人ほど勉強していた。漢文を読んでいるのである。生徒の 1 人の書いた漢詩の説明を受けたあと、「私もずいぶん話ましたから、あなたたちもこの村についての印象を一言ずつおっしゃって下さい」と言われた。「ここは静かでいいところです」と言うと先生は「村人たちの心が静かだから村も静かなのだ」と応じられた。「조용하다（チョヨンハダ）」という韓国語は「静かだ」という意味だが、それ以外にも「温和だ」「落ち着いている」「平穏だ」という意味があり、先生はそれらの意味を含ませておっしゃられたのだろうと思う。

今月は、韓国において学問がいかに重視されているかを思い知らされた。

書堂の門。少し観光地化されているので、このような物がある。

書堂の壁には「道를 論하고 義를 說하다（道を論じ義を説く）」。

この建物の中で生徒たちは論語や大学を読んだり漢詩を作ったりしていた。

「月度活動報告書」（2013 年 5 月度）

田保　顕（「頭脳循環派遣」研究員）

釜山大学校国際言語教育院韓国語講座の先生の紹介で、釜山市内にある英語塾を見学させて頂いた。地下鉄駅から 5 分ほど歩くと小さなビルがあり、その 4 階に塾がある。入り口を入るとエプロンをした塾長先生が小学生たちに課題をさせているところであった。挨拶をかわし、中を見せて頂く。

狭いフロアが 5 つほどの部屋に分けられており、日本の小さな学習塾に見られるようなホワイトボードの部屋、スカイプ授業用の部屋、英語の本や映画を見ることのできる部屋、さらには絵を習う部屋、音楽を習う部屋もある。

「本を見ますか？」と塾長先生が教材のたくさん積まれたところに連れて行ってくれた。文法、スピーキング、リーディング、リスニング、ライティング、といろいろある。ひとつ、200 ページほどの厚いリーダー本があった。英語圏の小学生低学年児童たちの読む短編物語がたくさん収められていた。一冊だけでかなりの量である。これを塾に通う小学生が読んでいるわけである。

スカイプ授業の部屋をしばらく見学させて頂いた。先生はその授業をスクリーン・スタディと呼んでいたが、それはフィリピンにいる英語講師と子どもたちがインターネットを介して英語の勉強をするものである。その時は小学 3 年生たちが物の値段について学習していた。子どもたちから発言することは少なそうだが、フィリピン人の先生はすべて英語で話しているわけだから、少なくともリスニングができなければならない。スカイプ授業が終わると、教室で復習する。教材に沿った副教材が用意されていて、今回なら値段に関する表現だとか、There is/are を使った表現なんかを復習していた。そして、ダイアログの部分をみんなが一斉に大声で読み上げ始めた。そして、問題を解くと先生の前に教材を一斉に突き出す。子どもはどこの国でも同じだ。

次に塾長先生が担当する小学 6 年生の授業を見学させて頂いた。小さなホワイトボードに 5 つの机しかない狭い部屋に女子のみが 4 人。授業は韓国語で行なわれるが、小 6 には難しいだろうと思われるような内容を扱っていた。今回のテーマは SQ(精神的知能)についてで、日本なら高校生が読むレベルである。当てられた生徒が英語を読み上げ、韓国語に訳していく。日本の学習塾と全く同じである。

韓国では基本的に大学受験まで入学試験を受けることはない。だから小学生のころから大学合格を目標に勉強するわけであるが、小・中学生は年 4 回、高校生は年 6 回の学内テストがあり、それが大変なのだという。

韓国における私教育機関の重要性を改めて思い知らされた。

「月度活動報告書」（2013 年 6 月度）

田保　顕（「頭脳循環派遣」研究員）

6 月に入って、釜山大学校国際言語教育院の韓国語講座で中級（3 級）のクラスになった。初級（1・2 級）までとは違い、先生は今までより「普通の」韓国語で話されるようになった。教科書に則って授業が行なわれる際の話はまだ理解できるが、ちょっと脇道にそれた話や「無駄話」などはついて行くのがやっとである。先日も、듣기（聞き取り）の練習の際、課題の CD 音源を聞いた直後、確認問題をやるのかと思いきや、いきなり「そういえばこの間、テレビでこんな話をしていた」と怪談を始められた。そういった話を「普通の」調子・スピードで聞き取るのも、いい勉強になる。

中級の授業になってから、使われる語彙数が格段に増えた。쓰기（作文）でもあまり幼稚なことは書けない。授業中も、新しい単語が出てくる度にその単語の意味を韓国語で言わされたり、それを使って即興で文を作らされたりと、授業中は 1 秒たりとも気を抜くことができない。

初級を終わらせた時点ではずいぶん話せたり聞き取れたりするようになったと思っていたが、まだまだ先は遠いようである。

ちなみに、語学教育院で 3 級まで終了すると 9 月から大学に編入学できる。実際、同じクラスにいる若い中国人数名は編入学が決まっている。しかし、「大学の先生から『留学生たちはなぜあんなに韓国語ができないのか』と苦情が出た。だから場合によっては入学を取り消す」と先生は仰っておられた。

この 1 年の韓国での滞在で得た知見について、韓国民族文化研究所で発表する機会を頂いた。「英語と韓国社会 −世界化・競争・両極化−」というタイトルで、1 時間半程度の時間で発表と質疑応答を行なった。そこで、「意思疎通のツールとしての英語は、いつしか『本人の能力を証明するためのもの』となった。その証明書を手に入れるため学生たちは勉学に励む。しかしそれを少しでも確実に手に入れられると信じられた一本の道に人々は殺到する。そこに不平等が生まれ、または不公平感がもたらされる」という話をした。ある先生から「意思疎通のツールとしての英語が能力を証明するものになった、というが、意思疎通能力そのものが現代世界で最も重要な能力ではないか。そして、そこでの意思疎通ツールがなぜ英語に限定されるのかを考えた方が面白いのではないか」という意見を頂いた。「意思疎通能力こそが現代世界における最重要の能力」であるという指摘は検証が必要だということも含めて面白いし、意思疎通の方法が多言語の相互獲得ではなく英語一択である「かのように」人々が振る舞うことに注目すべきだという指摘も重要である。

「月度活動報告書」（2013 年 7 月度）

田保　顕（「頭脳循環派遣」研究員）

釜山大学校国際言語教育院では 7 月 22 日（月）から 8 月 9 日（金）までの期間、“2013 SUMMER ENGLISH CAMP”（2013 学年度夏休み大学連携初等英語キャンプ）が開講された。主催は釜山広域市東莱教育支援庁である。

小学生たちは午前 9 時前にやってきて、午後 1 時頃帰っていく。午後 1 時頃は子どもたちを迎えに来た自動車でいっぱいになる。建物を出た子どもたちはそのまま車に乗り込み、去っていく。運転者は子どもたちの母親と思われる女性が多かった。子どもたちの教育に対する熱心さを見て取ることができる。

英語キャンプの授業の様子を見学させてほしい、と国際言語教育院の行政室にお願いに行った。英語キャンプの担当者が「規則により、授業そのものを見せるわけにはいかないが、コーディネーターと話をすることなら可能だ」と言い、話を聞かせてもらえるよう取り計らってくれた。コーディネーター氏は「個人的な見解だが」と断った上で、貴重な時間を割いて率直にお話して下さった。

「なぜ皆これほど熱心に英語を勉強するのでしょうか？」「日本も同じだと思いますが、大学入学試験には英語、国語、数学などいろいろな科目がありますが、その受験科目のうち、英語がかなり重要視されています。だからみんなが英語を勉強するのです」。「ここでは英語のみで授業が行なわれているのですか？」「もちろんです。韓国の学校では、小学 3 年生から英語を勉強します。子どもたちは英語で授業を受けることに慣れています」「日本では英語で英語の授業をするにも、それができる教員が足りません」「韓国では中学・高校より小学校に優秀な教員を派遣しています。初等英語は簡単で、授業ではちょっとサポートするだけで良いと思われていますが、教えるということでは一番難しいのです。確かに小学生には難しい英語を教える必要はないですが、英語習得において文法や語彙が大事なのではありません。コミュニケーション、意思疎通の能力が最も重要なのです。何よりも、相手を理解し、こちらの意思を伝えることが重要なのだと思っています。

「日本ではイギリスがモデルとなってきたようですが、韓国ではとにかくアメリカがモデルとされています。先を見越している人はすでに中国語を勉強しています。しかし、韓国人にとって英語を勉強するよりも中国語を勉強するほうが難しいのです。発音も文字も違う。だから、世界語としての英語を勉強するのです」。

ずいぶん冷静に観察・分析なさっておられることに感心した。日々真剣に考え授業をなさっているからであろう。

国際言語教育院玄関に掲げられた横断幕。

「月度活動報告書」（2013 年 8 月度）

田保　顕（「頭脳循環派遣」研究員）

韓国語講座は韓国語能力試験（TOPIK）3 級レベルまで終了した。この韓国語講座の受講生は釜山大学校へ入学することを目的とした外国人がほとんどである。だからクラスメートは皆若い。3 級レベルを修了すると「大学在学中に TOPIK4 級に合格する」ことを条件に、面接試験を経て大学入学を許される。私のクラスメートも 5 名が今回の 3 級レベル修了で大学に入学することになった。すべて中国人である。しかし心配なことに、彼／彼女らは私より韓国語会話ができない。大学での授業は内容も難しく、課題も多く、なかなか大変らしい。ただでさえ言葉のハンディキャップがあるのに、授業内容について行かれるだろうか。

実際、私自身、簡単な内容でなら話すのには困らないが、聞くことは難しい。対面状況はまだマシである。相手の身振りや表情などから何となく内容がわかるからだ。また、親しくなった人との会話でもさほど困難を感じない。ところが、電話を通しての会話になると途端に理解力が下がる。これは、日常会話がいかに文脈の理解と背景知識に依存して成り立っているかを示している。

8 月 15 日、韓国では光復節（광복절）と呼ばれ、公休日である。街にはたくさんの太極旗が掲げられる。ソウルでは大きなデモが行なわれたようである。それでなくとも最近、国家情報院による大統領選挙介入疑惑でソウルでは毎週末ロウソク集会が行なわれている。韓国人の大学生である友人に「韓国では政治デモが盛んだが、みんな政治に関心があるんだね」と話すと、彼は「みんな『声を挙げなければ政府が好き勝手をする』と思っている。政府の暴走を避けたいのだろう」と言った。

釜山で知り合った友人とソウルへ出かけた。今回はその友人の知人たちに話を聞くことが主目的であった。到着したその日にもソウル広場ではロウソク集会が開かれていた。ロウソク片手に集会に参加する人々の周りを機動隊が隊列を組んで囲んでいる。しかし、ちょっとした小競り合い以外に揉め事は見当たらなかった。興味深かったのは、ボランティアと思しき学生たちがおそろいの T シャツを着て、デモ後の清掃を行なっていることであった。

帰国直前、研究所の先生方に送別会を開いて頂いた。会場は温泉場にある中華料理店である。英語と日本語で話していた最初の頃に比べて、格段に話していただけるようになった。先生方は日本の放射性汚染水や食の安全についてずいぶん関心を持たれているようであった。言葉の問題のみならず内容の難しさも手伝って話の半分もわからなかったが、日本の原発事故への韓国における関心の高さを思い知らされた。

帰国当日。部屋のキーを返却するために寄宿舎の管理室へ行くと、韓国語講座で知り合った中国人学生たちがたくさん来ていた。私と入れ替わりに寄宿舎へ入るのだ。

研究室の조정민先生が車で空港まで送って頂いた。研究所の김동철所長もお越し下さり、

とても恐縮した。当日朝、韓国高速鉄道（KTX）が大邱市駅付近で脱線し、大変なことになっているとのことだった。おそらく、公共交通機関は混雑していたことであろう。

空港で両先生にお礼と別れを告げ、出国手続きを済ませた。ゲートの待合所にあるベンチに腰掛けながら、一年とは何と短いことか、と思った。韓国で多くの人と出会い、話し、韓国についていろいろ理解できたと思う反面、まだ始まったばかりという気がする。

釜山との、ひいては韓国との縁はこれからも長く続きそうである。